

☆授業意図

- ・ 「字のないはがき」は2学期単元であったが、1学期末に実施。
- ・ 本時は第4時（授業レシピ参照）
- ・ 一つの場面の中にもいろいろな気持ちが含まれていることをとらえさせる意図があった。
- ・ 後半部分は、少し時間がかかり、レシピどおりにはいかず、三場面まで行かなかった。

☆授業実践内容

1 父親の気持ちのわかるところにサイドラインを引き、気持ちを書き込む。

- (1) ライン部分の確認
- (2) 線を引いた人の確認
- (3) 他の人の指摘部分に別の色のラインを引く

生徒は2箇所指摘

- ・ おびたどしいはがきにきちょうめんな筆で自分宛のあて名を書いた
- ・ 「～」と言ってきかせた。
- (4) なぜ気持ちが伝わってくると感じたか考えさせる。
 - ・ 「おびたどしい」とは？ 手で示せ
 - ・ 何ではがきをそんなにたくさん書いていると思う？
→自分に送るように。
 - ・ 父は何がしたかったの？
→健康でいるかどうかを確認したかった。

問題点：2場面では父親の気持ちは見つけられなかった。

机間巡視中の補助発問

- ・ 父に関するものは何でしょう。
- ・ 誰が渡したのでしょうか。ということは？
- ・ 「父の気持ちがわかる場所はないじゃん」といういけんがあるけど、よーく探してください。
- ・ 父に関わるものは出てこない？関係するものはない？
- ・ ボソボソっとでてきたよ。

1・3場面には手がかりがあっても、2場面には、直接的なものはない。こういう状況のときにどういう手立てをとるとよいか。
会場の意見を求めたい。

☆ 隣近所との相談タイム



会場意見A ワークシートには第2場面があるが、生徒の動きが止まっている。
そこで、「2場面には手がかりはないんだね。」と挑発してみてもどうか。そうすれば逆にを見つけようとするはず。

B 表現からではわかりにくいので、はがきをもらった父の気持ちを想像してみようとするはず。

C 2場面には手がかりがあると思う人は○、ないと思う人は×をつけなさい。といって挙手させる。

個人的には、1・3場面を確認した後、その変化に着目させる中で2場面に戻った方がスムーズに行く気がしました。

☆ では、どう切り抜けていったかDVDを見てください。

・ おびたしいはがき ・ ポストに入れなさい から、父親のどんな気持ちがわかりますか？

とても心配だ。

→おびたしいほどのはがきを渡す意味は？

→どういう思いになりたかったの？

→こういうことをすることで何がしたかったの？

→はがきの変化とともに、父親の気持ちを考えよう

→ヒントははがき



うれしい・安心・心配などの短冊が出される。

→ どこからこういう気持ちだと思ったのか考えてください。

→ この表現から出てきたか考えて。

最終的にはがきに着目した父親の気持ちに触れることができた。

☆ 野口先生の解説

- ・ 板書がきれいな字である。手本にできる。
- ・ 表情がよく、生徒を好意的な気持ちにさせる。
- ・ 享受話法でよい。
- ・ 問題点として、どういう学力がついたのか形成されたのか見えてこない。
- ・ 「活動あって指導なし」日本の授業の課題である。
- ・ 場面1・3には「父」という言葉があり、2場面にはない。
- ・ 3場面には、感情の高ぶりが有り、気持ちの変化はあるのか、じゃあどのことばでわかるのかといっても書いてないのでわからない。

表現には2種類ある

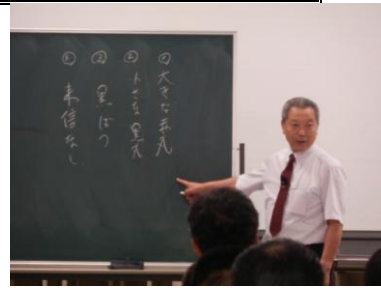
顕在表現

潜在表現 内言からわかることをつないでいって

気持ちを考えることが大切

4つのことが書かれている

- ① 紙いっぱいほみだすほどの大赤丸
- ② 急激に小さくなった黒鉛筆の小丸
- ③ ×
- ④ 返信なし



説明するより、父の言葉で表現させるといい

たしかに小学生でも吹き出しスタイルにすれば、人物に同化してかくことができるなあと実感。

「心配だなあ」よりも詳しく答えたときにはほめる。→これが広がる

おそらく姉さんに手紙を書いたはず。

「ないたそうな」ということは誰かから聞いたはず

書いてあることを元に、書いてないことを合理的に推測することこそ鑑賞のおもしろさである。

わからないことがわかってくる

気持ちに同化・感情移入させる。→説明させるよりも人物の言葉にさせた方がいい

サイドラインは引かなくていいのか、引かなければならないのか

引くべきなのか否か なぜ引いてないのか 正誤当否をはっきりさせる。

算数の場合 $3 + 4 = 7$

しかし国語となると7でなく6も8もOKであったり、境目がないので5も9もOK?

教科内容・教材内容 の2つを意識しなければならない。

「内言」を含め、学習用語は、教えなければならない。

→ 年度内に明治図書から全5巻で発刊予定

